

曲目解説と作品の聴きどころ

西原 稔（音楽学者・桐朋学園大学特別招聘教授）

「ヴァイオリン・ソナタ 第2番」Op.100

1886年、ブラームスが夏の期間の滞在地として選んだのは、スイスのインターラーケンのトゥーン湖畔であった。これは友人のヴィトマンの強い推薦によるもので、ブラームスは5月27日からここで夏の期間を過ごす。トゥーン湖畔は名峰アイガーを望む風光明媚な場所で驚くほどの美しい自然に囲まれ、彼はたちまちにしてこの魅力のとりことなり、10月5日にウィーンに戻るまで、長期間にわたってここに滞在した。この年の滞在期間に彼は、「チェロ・ソナタ第2番」や「ヴァイオリン・ソナタ第2番」、「ピアノ三重奏曲第3番」などの室内楽や、「5つの歌曲」作品105を完成した。とくに「ヴァイオリン・ソナタ第2番」と「チェロ・ソナタ第2番」は用いられている動機が共通であるなど、密接な結びつきをもっている。これらの作品はどれも生命感に溢れ、ブラームスがトゥーン湖畔での滞在を満喫したことを示している。健脚であるブラームスはアルプスのグリンデンヴァルト氷河にまで足を運んだこともあった。このトゥーン湖畔では「緑色のよろい戸のある茶色の家」の一階の全室を借りた。一階全室を借りたのは他の賃貸者に邪魔をされたくないというのが理由で、ここでの滞在中は、作曲に際して広いベランダや部屋を歩き回って構想を練った。ブラームスの生活は規則正しく、朝5時には起床して、自分でコーヒーをたて、午前中は作曲に専念する

毎日を送った。午後になると友人や知人を訪ねるのが常で、毎週ベルンに住む友人のヴィトマンのもとに列車で出かけて、彼の家で読書に耽った。また、彼のこの夏の住まいには友人らも訪れ、「雨の歌」の詩を書いた詩人のグロートやアルト歌手のシュビースなどもそうした一人で、「5つの歌曲集」はシュビースのために作曲された。

第1楽章 アレグロ・アマービレ、イ長調、4分の3拍子。叙情的で至福感にあふれた楽章で、ピアノとヴァイオリンの対話が聴きどころである。第2主題はこの時期に作曲した歌曲「歌の調べのように」と密接に結びついている。第2楽章 ヘ長調、4分の2拍子。アンダンテ・トランキッロの部分とヴィヴァーチェの部分とが交代する構成になっている。第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ（クワジ・アンダンテ）、イ長調、2分の2拍子。ヴァイオリンによってゆったりと強い憧れを込めた動機が奏される。主題で奏される嬰へ音には強い想いが込められている。この楽章でも歌曲集（作品105）の「私のまどろみはますます浅くなり」でもちいられる3度音程の動機が用いられているのが聴きどころである。



シューマン



クララ・シューマン

ブラームス年表

1810 シューマン誕生
1833 ブラームス、ドイツのハンブルクで生まれる
1840頃 音楽教育を受け始める
1853 ハンガリーのヴァイオリン奏者と演奏旅行。ハンガリー音楽を知る
シューマン夫妻を訪問、「ピアノ・ソナタ第1番」を演奏。シューマンは「音楽新報」に「新しい道」を寄稿し、ベートーヴェンの再来と評価
1854 シューマン、ライン川に投身自殺を図る
1856 シューマンの死
1858 ハノーファーで「ピアノ協奏曲第1番」試演。デトモルト宮廷での勤務が始まる
1859 ライプツィヒでの「ピアノ協奏曲第1番」の演奏は不評
ハンブルク女声合唱団の活動始まる
1860 「セレナード第1番」、「セレナード第2番」、「弦楽六重奏曲第1番」初演
1861 「ヘンデルの主題による変奏曲」、「ピアノ四重奏曲第1番」初演



トゥーン湖畔

「5つの歌曲」Op.105

「ヴァイオリン・ソナタ第2番」を作曲した1886年に作曲し、この歌曲集はこのソナタと結びつきを持っている。ブラームスの歌曲集の中でもっとも親しまれている作品である。

第1曲「歌の調べのように」 グロートの詩に付曲された作品である。「それは歌の調べのように、ひそやかにわたしの感性にしみわたり」という歌詞で、駆け上がる分散和音は解放されたかのような息吹に満ちている。第2曲「私のまどろみはますます浅くなり」 リンクの詩による作品で、この歌曲と似た旋律は「ピアノ協奏曲第2番」の第3楽章でチェロの独奏で奏される。この旋律がこの歌曲として完成された。「誰も目を覚まさないし、あなたのために扉を開けない」という場面では扉をノックするかのような3度音程の表現が印象的である。第3曲「嘆き」 低地ライン地方の民謡詩に作曲された作品で、恋した娘に男を信じていけないと歌う歌曲で、押し殺したような同音反復が特徴的である。

ウィーン到着。「ピアノ四重奏曲第2番」初演
ウィーン・ジングアカデミー指揮者就任
ヴァーグナーとの出会い。ウィーン・ジングアカデミー指揮者辞任
母の死。画家フォイアーバッハとの出会い。「バガニエニの主題による変奏曲」、「ホルン三重奏曲」初演
父の再婚。「弦楽六重奏曲第2番」、「ワルツ集」、「ピアノ五重奏曲」初演
「ドイツ・レクイエム」の最初の3曲がウィーンで初演、失敗を喫する
「ドイツ・レクイエム」がブレーメンで初演（第5曲は未完）
「ドイツ・レクイエム」全曲初演、「アルト・ラブソディ」、「ハンガリー舞曲」第1集と第2集、「マゲローネの歌」完成
ミュンヘンでヴァーグナーの「ヴァルキューレ」と「ラインの黄金」観劇
「運命の歌」初演、ウィーン楽友協会監督受諾

第4曲「墓にて」 リリエンクローンの詩による作品で、分散和音の動機に担われ、弱音で下から上がる分散和音の表現に変わる。この部分は「5つの歌曲集」の「墓にて」の動機を思わせる。
第5曲「裏切り」 ピアノによる静かな短い前奏で始まる。レムケの詩によるこの歌曲の結末は残酷で、「花の中に横たわる死体」が歌われる。

「アルト、ヴィオラ、ピアノのための二つの歌曲」Op.91

この作品はブラームスの宗教性をよく表しており、《ドイツ・レクイエム》の作品の創作と内面において深く結びついている。この2曲の作品の創作時期は大きく異なる。第1曲「ひそかな憧れ」は1884年に完成し、第2曲「聖なる子守歌」は1863-64年の作曲で、二つの作品には20年の時の隔りがある。二つの作品は1885年1月30日に初演された。この作品はヴィオラに対するブラームスの独特の感性をよく示しており、ヴィオラとアルトはあたかも二重唱を思わせる。

第1曲「ひそかな憧れ」 リュッケルトの詩による作品で、ピアノの下行分散和音によってヴィオラが揺れるような非常に深い情感に満ちた長い主題を奏す。「黄金の夕焼けにひたされて、森はなんと壮麗に見えることであろう」と歌う。
第2曲「聖なる子守歌」 ロベ・デ・ペーガの詩をガイベルが翻訳した詩に作曲した作品で、牧歌的で平明な旋律で始まり、その楽想はまさに子守歌である。その楽想は彼が手掛けていた「マリアの歌」などの宗教合唱作品に通じる。「夜、風の吹きすさぶ中を棕櫚のまわりであなたは舞っています。聖なる天使よ、木々のざわめきを沈めておくれ！私の子供が眠っている。私の子供が眠っている」と歌われる。

父の死。「勝利の歌」初演。楽友協会の音楽監督としての最初の演奏会
2曲の「弦楽四重奏曲」初演。バイエルン国王より「学問と芸術のためのマクシミリアン勲章」授与
「中小企業のための皇帝フランツ・ヨーゼフ基金」のための演奏会に出演。
「ハイドンの主題による変奏曲」、「ピアノ四重奏曲第3番」初演
ウィーン楽友協会との契約解消。「弦楽四重奏曲第3番」初演
「交響曲第1番」初演、バイロイト祝祭劇場開場
「交響曲第2番」初演
第1回イタリア旅行。ベルチャハでの夏の滞在
「ヴァイオリン協奏曲」、「ヴァイオリン・ソナタ第1番」初演。「8つのピアノ小品集」完成
ボンでのシューマン記念碑除幕式に参列。「悲劇的序曲」初演
「ピアノ協奏曲第2番」、「大学祝典序曲」、「悲歌」初演

「ピアノ五重奏曲」Op.34

この作品の作曲の過程は複雑である。作品はシューベルトの「弦楽五重奏曲」の研究を土台に、もともとは弦楽五重奏曲として作曲が進められた。ブラームスはすでに1861年に友人のデイトリヒにこの弦楽五重奏曲の一部を弾いて見せており、その後1862年8月26日付のクララ宛の手紙でブラームスはこの作品（終楽章は未完成）について言及している。その後、全楽章が完成すると友人らの前で試演されたが、この試演でとくにヨアヒムは作品の問題点を指摘した。ブラームスはその助言をもとにさらに推敲を重ねる。その後、2台ピアノ版に作り直し、更にこの2台ピアノ版を土台に1864年10月末にブラームスはピアノ五重奏曲の最終的な形で完成した。作品はピアノ五重奏版と2台ピアノ版のふたつがある。完成したピアノ五重奏曲は1866年6月22日に初演された。

1864年夏、ブラームスはバーデン＝バーデンにおいて、2台ピアノ版のこの作品をクララとの共演で、ヘッセン王女アンナの御前で演奏した。王女はこの作品にことのほか強い感激を覚え、ブラームスは2台ピアノ版とピアノ五重奏曲の自筆譜をこの王女に献呈した。この「ピアノ五重奏曲」はすぐれてベートーヴェン的な作品で、主題と動機の徹底的な展開を行い、第1楽章の主題動機はその他の楽章にも応用されて緊密で、すぐれて密度の高い作品が生み出されている。弦楽五重奏曲版の試演に際してヨアヒムは「無骨である」との感想をもったが、それはこの作品のきわめて緻密な音楽構成に由来するところが大い。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロoppo ヘ短調 4分の4拍子。ピアノとヴァイオリンとチェロが力強くユニゾンで主題を提示する。主題の提示ののち第9小節からピアノが冒頭の主題を基にした抒情的な主題を奏し、これに基づいて各楽器がそれをカノン風に展開する。このカノン風の表現は彼のバッハ研究の表れである。楽章はソナタ形式で構成され、これらの主題が緊密に展開される。

「交響曲第2番」を各地で演奏。「ピアノ三重奏曲第2番」、「弦楽五重奏曲第1番」、「運命の女神の歌」初演
ヴァーグナーの死。ドヴォルザークの訪問。「交響曲第3番」初演
ミュルツェンシュラクで夏の滞在
「交響曲第4番」初演
「交響曲第4番」を各地で演奏。弟フリッツの死。「チェロ・ソナタ第2番」、「ヴァイオリン・ソナタ第2番」、「ピアノ三重奏曲第3番」初演。
トゥーン湖畔で夏の滞在。ウィーン・トーンキュンストラー協会名誉会長
「学問と芸術のための勲功騎士」選出。「ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲」初演
グリークとチャイコフスキーの訪問を受ける。「ヴァイオリン・ソナタ第3番」初演
ハンブルク名誉市民に選ばれる。オーストリア皇帝よりレオポルト勲

第2楽章 アンダンテ・ウン・ボーコ・アダージョ 変イ長調 4分の3拍子。シューベルトの歌曲集「冬の旅」の第10曲「休息」との影響関係が指摘されている。ピアノの上で奏される第1ヴァイオリンとヴィオラとピアノの左手は8分休符で始まり、3拍目は間に休符を挟みリズムで、リズムの表現が重要な役割を担っている。中間部、主部の変イ長調からは遠いホ長調が用いられている。
第3楽章 スケルツォ アレグロ ハ短調 8分の6拍子。下から突き上げるような強い駆動力を持った楽章で、チェロの奏する同音連打で開始し、その上にシンコペーションを用いた主題が不安定な力動感を作り上げる。主部は駆け立てるような変ニ音・ハ音の動機で終わるが、これはシューベルトの《弦楽五重奏曲 ハ長調》D951の第4楽章からの影響と考えられている。
第4楽章 ボーコ・ソステヌート 2分の2拍子、アレグロ・ノン・トロoppo 4分の2拍子 ヘ短調。序奏はオクターブの跳躍音程を各パートでカノンのように反復し、非常に玄妙な開始である。第13小節からの第1ヴァイオリンとチェロによる下行動機の「嘆きの動機」は感動的である。主部でチェロによって提示される主題は素朴で、民謡調である。コードは嬰ハ短調で、第1楽章におけるような駆け立てるようなリズムが再び登場する。その後主調のヘ短調で圧倒的な迫力で作品を締めくくる。



ウィーン中央墓地にある
ブラームスの墓

章授与。「祝典と格言」初演
「ピアノ三重奏曲第1番」改訂版初演、「弦楽五重奏曲第2番」初演
イシュルでの夏の滞在
「イシュル遺書」を書く。「クラリネット三重奏曲」、「クラリネット五重奏曲」初演
姉エリーゼの死。「7つの幻想曲」、「3つの間奏曲」の完成
「6つのピアノ小品集」、「4つのピアノ小品集」の完成
2曲の「クラリネット・ソナタ」の完成
各地の音楽祭参加
「4つの厳粛な歌」の初演、「11のコーラル前奏曲」の作曲
ブラームスの死、ウィーン中央墓地に埋葬